



山吹の咲く泉

この歌は、天武天皇と額田王の娘であった十市皇女が亡くなった際に、異母兄の高市皇子が詠んだ三首



山振の立ち儀ひたる山清水 酌みに行かめど道の知らなく

詠

山吹の花が美しく飾っている山の泉を酌みに行つて蘇らせたいと思うのだが、道を知らぬことよ。

高市皇子 巻二 (一五八番歌)

の短歌のうちの一首です。

『日本書紀』巻第二十九によれば、天武天皇が神をまつるために行幸しようとしていた天武七(六七八)年四月七日の明け方、十市皇女が急病で亡くなったとあります。同月十四日には皇女を「赤穂」の地に葬つたとも記されていますが、それが現在のどこにあたるかは諸説があり、よくわかっていません。

天武天皇には十人の妻と十七人の皇子や皇女がいたということですが、格別の恩情をもつて十市皇女の死を悼み、葬儀の際には泣き声をあげる儀礼をも行つたと記されています。そうした特別扱いには、壬申の乱が大きく関わっていたとみられています。

壬申の乱とは、天智天皇の没後の六七二年に、天皇の弟である大海人皇子(後の天武天皇)と、天皇の子である大友皇子との間に起こった皇位

継承争いです。十市皇女にとって、大海人皇子は実の父であり、大友皇子は夫でした。どちらが勝つても、皇女にとっては大切な人を失うことになり、つらい心境であったと想像されます。

勝利したのは、大海人皇子でした。その結果、夫だった大友皇子は自害し、自分は勝者の娘として生きながらえることになりました。六年後に彼女が急死した病名は、『日本書紀』にも一切触れられておらず、自殺の可能性も指摘されています。

高市皇子はそんな十市皇女の死を悼み、彼女を蘇らせたいと歌に詠みました。『万葉集』に残る高市皇子の歌はこの三首だけです。山吹の黄色い花が咲き乱れる山中の泉とは、死者の国とされた黄泉を暗示しているともいわれています。

(本文 万葉文化館 井上さやか)

万葉ちゃんのつぶやき

和歌に関連するものを紹介するよ!



川上村の村花 山吹

毎年四月頃になると、川上村のあちこちで見ることが出来る山吹。株元からたくさん伸びる枝の先に、直径3〜4センチの鮮やかな黄金色の花が一斉に咲き乱れ、まばゆいばかりの艶やかさが道ゆく人の目を樂ませてくれます。



川上村役場
☎0746-52-0111 FAX 0746-52-0345
www.vill.kawakami.nara.jp/

県広報広聴課 ☎0742-27-8326 FAX 0742-22-6904